

# 白氏文集 二十一 繚綾・下

加藤淳平

繚綾あやぎの詩の後半なり。類ひ稀なる美しさの繚綾は、宮廷よりの特別註文もて、製作せらる。天上とは宮中のことにして、人間とは普通の世間を謂ふ。天子の指示を口頭にて傳ふるは宦官なり。宦官の指示により、高價なる繚綾の生産は行はる。裏に幾何の利権ありや。詩は仄かに暗示するのみなれど、想像するは可ならむ。唐代後半、科擧官僚と閥族出身者の間に、權力鬭争苛烈なれども、官僚と宦官の鬭争、更に激しく、陰慘なりき。皇帝の宦官に弑せられたるも稀ならず。斯かる官僚と閥族、官僚と宦官の黨争、唐の國力を弱め、唐は徐々に衰滅に向へり。

去年中使宣口敕

去年中使 口敕を宣ふ

天上取様人間織

天上に様を取り 人間じんかんに織らしむ

織爲雲外秋雁行

織るは 雲外秋雁の行を爲し

染作江南春水色

染むるは 江南春水の色を作る

廣裁衫袖長製裙

廣く衫袖に裁ち 長く裙を製す

金斗熨波刀剪紋

金斗もて波を熨し 刀もて紋を剪る

異彩奇文相隱映

異彩と奇文 相隱映し

轉側看花花不定

轉側して花を看れば 花定まらず

昭陽舞人恩正深

昭陽の舞人 恩正に深し

春衣一對直千金

春衣一對 直あたひ千金

汗沾粉汚不再著

汗に沾ぬれ粉に汚るれば 再びは著せず

曳地踟泥無惜心

地に曳ぬき泥を踟ふめば惜しむ心無し

繚綾織作費功績

繚綾織り作すに 功績を費やす

莫比尋常繪與帛

尋常の繪えうと帛に比するなかれ

絲細縵多女手疼

絲細く縵いとり多くして 女が手疼いたむ

扎扎千聲不盈尺

扎扎千聲すれど 尺に盈たたず

昭陽殿裏歌舞人

昭陽殿裏 歌舞の人

若見織時應也惜

若し織る時を見ば 應まさに也惜またしむべし

(大意) 去年宮中から使ひの宦官が来て、皇帝御自らのお言葉を傳へ、宮中の文様を普通の人に織らせるとのことだった。雲の外を秋の雁が行く模様を織り、江南の春の水の流れる風景を染めた。かうして完成した繚綾の織物をゆったりと裁斷して上衣の袖とし、裾長に袴を作る。金のこてで皺を伸ばし、裁ち缺で紋を切り取る。珍しい彩りや奇抜な模様が見えつ隠れつし、こちらと向ふから花の模様を見ると、花とも見えない。宮廷の大奥の舞姬たちへの、主上の恩は深い。一對の春の衣裳も、千金の値打ちがある。そんな衣裳でも汗で濡れたり、白粉に汚れたりすれば、二度と着ることはない。土の上で裳裾を曳き、泥を踏み付けたら、惜しむ心は無い。この繚綾は、作るのに大きな手間が掛かる。普通の絹の布とは比較にならない。織るのは細い糸である上に、絲縵りも多く、織女の手は痛む。機はたの前に坐つてさつさつと何回も何回も織つても、まだ一尺にならない。宮中の昭陽殿の歌を歌ひ、舞を舞ふ女性たちも、もしこの布を織るのを見たら、もっと大切にしなければならぬと思ふだらう。

(平成二十九年七月六日受附)